

弟子の祈り パート2 (マタイ6:1-13)

6:1 人に見せるために人前で善行をしないように気をつけなさい。そうでないと、天におられるあなたがたの父から、報いが受けられません。6:2 だから、施しをするときには、人にほめられたくて会堂や通りで施しをする偽善者たちのように、自分の前でラッパを吹いてはいけません。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。6:3 あなたは、施しをするとき、右の手のしていることを左の手に知られないようにしなさい。6:4 あなたの施しが隠れているためです。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。6:5 また、祈るときには、偽善者たちのようであってははいけません。彼らは、人に見られたくて会堂や通りの四つ角に立って祈るのが好きだからです。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。6:6 あなたは、祈るときには自分の奥まった部屋に入りなさい。そして、戸をしめて、隠れた所におられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。6:7 また、祈るとき、異邦人のように同じことばを、ただくり返してはいけません。彼らはことば数が多ければ聞かれると思っているのです。6:8 だから、彼らのまねをしてはいけません。あなたがたの父なる神は、あなたがたがお願いする先に、あなたがたに必要なものを知っておられるからです。6:9 だから、こう祈りなさい。『天にいます私たちの父よ。御名があがめられますように。6:10 御国が来ますように。みこころが天で行われるように地でも行われますように。6:11 私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください。6:12 私たちの負いめをお赦してください。私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました。6:13 私たちを試みに会わせないで、悪からお救いください。』
〔国と力と栄えは、とこしえにあなたのもものだからです。アーメン。〕

導入

先週は、弟子の祈りの前半から、5つの重要なことを学びました。

1. 神を父と呼ぶ前に、私たちは神の家族に迎え入れられなければなりません。
2. 天の父である神は、私たちの人生の主権者であります。神は私たちの必要を満たしてくださいますが、私たちに躰けもなさいます。
3. 祈る時は、まず神の栄光を最優先に考える必要があります。
4. 個人的なニーズについて心配する前に、神がどのようなお方であるかを認識し、神の御名を称える必要があります。神の誉れを大切にすべきです。
5. 神に人生を明け渡し、神のみこころとご計画が地上で成就することを求める覚悟が必要です。

今日は引き続き、弟子の祈りの後半を学びます。

最初にマタイ6:11です。「私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください。」

この箇所からおわかりのように、日常のニーズについて祈ってよいのです。

イエスは日常のニーズを後半の最初に持ってこられました。そうすることによって、生活上のニーズについて祈ることも、罪の赦しや敵に打ち勝つために祈るのと同様に信仰の要ることだと示しておられるのです。恵まれない人のために食事を提供する女性の働きは、神のみことばを伝える牧師に劣ってはいません。内容は違っても、神はどちらも評価してくださいます。

「日ごと」と訳された言葉は多少わかりにくいものです。ギリシャ語の単語は、「エピオウシオス」です。この単語はこの個所にしか登場しません。直訳すると、「来たる」つまり、来たる日のためのパンとなります。

これはユダヤ人の夕刻や朝の祈りにぴったりの言葉だったでしょう。朝の祈りなら今日のパンのために、夕方の祈りなら翌日のパンのために祈ります。

食べ物が何もなく、次の日食べられるかどうか神に頼るしかないという状況にならなければ、本当の意味でこの個所を理解するのは難しいでしょう。

たいていの家庭では、スーパーで買い物をし、スーパーで買ったものを冷蔵庫や冷凍庫に食べ物がたくさん入っています。一週間くらいの食物の蓄えはあるでしょう。好きなものを安く手に入れようとコストコに行って、二か月分ほどの食料を買う人もいます。

日々の必要を満たしてくださる神の恵みを経験したことのある人は少ないと思います。

富は、私たちが自力でやっていけるように感じさせます。一方、神は、神に頼らないとやっていけないと私たちが思うことを望まれます。

冷蔵庫にどれだけ食料があっても、銀行に預金がたくさんあっても、祈るときには必ず認めなければならないことがあります。それは、神が私たちに日々の必要を備えてくださっているということです。神は、その日一日に必要なものを備えてくださいます。

私は以前、スコットランドのエジンバラで2年間聖書学校に通いました。私たち夫婦はそのときに、毎日必要なものを与えてくださるよう神に頼ることを学びました。

私たちに収入がなく、その日の必要を神が満たしてくださることを信じなければなりません。必要なものを一週間分与えてくださる時もあれば、その日の分だけが与えられることもありました。

あるとき、ウェンディはたった1ポンド（約180円）を持って一週間分の食料を買いにスーパーへ行きました。

ウェンディはスーパーに着きましたが、たったそれだけのお金で何を買おうか決めかねました。彼女が途方に暮れていると、誰かが5ポンド（約1000円）を手渡してくれました。30年前の当時、5ポンドあれば十分に食べ物を買うことができました。ウェンディは、神が必要を満たして下さったと喜びながら帰ってきました。

私たちにあるのが一日分であろうと、一週間分、一か月分であろうと、すべては神の恵みによるものです。私たちは、食事をするたびに神をたたえることができます。「いただきます」と言うとき、私たちは、「日ごとの糧」を与えてくださった神に感謝をささげるのです。

「糧」と訳された単語はパンを意味します。イエスは、物質的なニーズを代表してパンとおっしゃいました。

ここで皆さんに説明しておきたいことがあります。私たち夫婦は、約30年前に「信仰による生き方」について非常に大切なことを学びました。ピリピ4：19には「私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、あなたがたの必要をすべて満たしてくださいます。」というみことばがあります。

パウロがこう語ったのは、忠実にささげる教会についてです。言い換えると、この教会は什一献金にとどまらず、惜しまずささげていました。ですから、当時の私たちは、収入がなくても神が与えてくださるものの中から少なくとも一割を神におささげしようと決めていました。

私たちは忠実にささげ、神は必要を備えてくださいました。私たちは常に「必要なもの」について祈りました。「必要」でなければ祈りませんでした。本当に「必要」なものなら祈り、神はその「必要」に応えてくださいました。

私たちは、「ほしいもの」と「必要なもの」の違いを学びました。

人は、必要でないものをたくさん欲しがるといえます。

宣伝広告や私たちの欲、この世のあり方によって、人は「ほしい」を「必要」と勘違いしてしまいます。

聖書学校に入って最初の一年半、私は車を持っていました。エジンバラに近い小さな町ダルキースで借家に住んでいたのです。車が必要だったからです。

聖書学校のある町外れまで行くのは大変でした。神は一年半、毎日必要を満たしてくださいました。それがある日突然、止まったのです。天国銀行にお金がなくなったかのようでした。

私たちは祈りに祈りを重ね、自分たちの生活を省みましたが、神の祝福を邪魔するようなものは何も思い当たりませんでした。

そんなある日、私は気管支炎になって寝込んでしまいました。ベッドで横になったまま祈っていると、あることに突然気づきました。聖書学校が私たちの借家から数キロのところに引っ越してきたので、もう車は要らなくなったのです。学校にはバスで通えるからです。

車を売ると決めた途端、私は心に平安を得ました。

私はベッドに横たわったままで、学校の別の生徒に車を売りました。するとすぐに、神は今まで通りお金を与えてくださいました。私は常に、私の必要を満たしてくださいという神の約束を堅く信じてきました。あの車は私にはもう必要ありませんでした。私は、「ほしい」と「必要」の違いを学ばなければならなかったのです。

この話には続きがあります。神は「恵み」の神でもあられます。私の車を買った生徒は、車検まであと3カ月という錆びついたポンコツ車に乗っていました。彼は私を気の毒に思って、その車を無料で譲ってくれました。私は体調がよくなるまでその車をガレージに置いておきました。

元気になった私は、錆びを覆うために塗装スプレーで車全体を塗装し、廃車場で新しい運転席を買って古いものと交換しました。

車検も通ることができ、1988年に日本に来るまでの少なくとも2年間、この車に乗りました。最後に廃車場に持って行くと、一万円の値がつきました。

私たちはいつでも、必要なもののために祈ることができます。けれども、それがほしいものなのか必要なものなのかを見分ける霊的な分別が要ります。

ほしいものと必要なものを見極めが難しいときもあります。

私たちは日本に来る前、3カ月の準備期間がありました。その間、しなければならないことがたくさんありました。私は、車のことも時間をとって祈りました。値段も税金も安く燃費もいい軽の車がよいと思いましたが、娘の結婚式で家族が来ることを考えると、軽よりもっと大きな車が必要でした。日本に着いてすぐ、私たちはホンダの小型車を借りました。小回りが良く、とても便利だったので、ウェンディは同じような小型車がほしいと思うようになりました。

私たちは、お手頃な値段で走行距離も少なめの車を見つけました。その夜、私たちは祈りました。「もしこの車が私たちの必要を満たしてくれるなら、次の日にまだそこにあるようにしてください。そうすれば買います。けれども、もし私たちの必要に合わないものなら、どうか別の人にこの車を売ってください。」と祈りました。

翌日私たちが行くと、その車はもう売れていました。その代わりに、トヨタの7人乗りの車がありました。それを見てすぐに、これが買うべき車だと確信しました。値段は少し高めで燃費も軽よりはよくありませんが、私たちのニーズにも他の人たちのニーズにも合うものです。

この個所で見過ごしてはならないもうひとつのことは「日ごとの」必要のために祈るということです。

必要なものがぎりぎりまで与えられずに待たなければならなくても、がっかりしないでください。

聖書学校の学生だったある日、私は神に腹を立てました。車の税金を納める期限が翌日に迫っているのに、税金を払うお金がなかったからです。当時のイギリスでは、納税証明を車のフロントガラスに表示しなければなりません。私は神に裏切られたように感じながら朝食のテーブルに着きました。

すると郵便配達の人に来て、手紙もカードも入っていない封筒を渡されました。そこには、車の税金を払えるだけの現金が入っていました。神はご自身の約束を守られたのです。お金はその日まで必要ありませんでした。私は、神のみことばどおりに神を信頼しなかったことを戒められました。

私たちが思うタイミングで物事が起こらないと不安になってしまいますが、最後まで私たちが神に頼ることを、神は望まれます。もちろん、それは簡単ではありません。

では、12節に進みましょう。「私たちの負いめをお赦してください。私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました。」

リビングバイブルには、「私たちの罪をお赦してください。私たちも、私たちに罪を犯す者を赦しました。」とあります。

14-15節で、イエスはその意味を説明されます。

「6:14 もし人の罪を赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたを赦してくださいます。6:15 しかし、人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの罪をお赦しになりません。」

これははっきりとした大きな課題です。力のある祈りをするには、赦す心を持った人でいなければなりません。

説教者レーマン・ストラウスは言いました。「人を赦さない人は、罪を犯さないように気をつけよ。」

では、「赦す心」をいつも持っているにはどうすればよいでしょう。

1. 神の赦しを常に心に留める。

イエスはルカ7：47で、多く赦された人は多く愛するとおっしゃいました。私たちは、神の恵みあわれみと赦しが日々必要なことを謙虚に認めなければなりません。

2. 「思い上がり」から自分自身を守る。

人をなかなか赦せないと思う人は、自分は赦されても他の人には赦される資格はないという勘違いをしてしまっています。思い上がっていると、自分の罪が見えず、イエス・キリストに出会って罪を赦される以前の過去の自分の姿を忘れてしまいます。

3. ローマ12：19のみことばを忘れない。

ローマ12：19「愛する人たち。自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。それは、こう書いてあるからです。『復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる。』」

赦す心を持たないということは、その相手に対して自分自身が裁き主となるということです。実際には、必要に応じて神がその人を裁き、罰してくださいます。私たちは全地の裁き主が正しく裁いてくださると信頼できます。正しく裁けるかどうか、自分自身は信用できません。

4. 恨みや赦さない心は、神との交わりを壊す。

私たちの交わりは、赦しと直結しているとイエスははっきり教えておられます。また、私たちが人を赦さないなら、神との交わりが壊れるともおっしゃいます。神の子であることに変わりはありませんが、赦さない心のせいで、力ある祈りをするができなくなります。

赦す心を持たないと、私たちの祈りの生活は力を失います。

では、13節に進みましょう。

「私たちを試みに会わせないで、悪からお救いください。」

この箇所は、ふたつの別々のものではなく、ひとつとして捉えるべきです。これを一連のものとして理解しないと、問題が生じます。

まず、神に私たちを試みに会わせないでくださいと祈ることです。

ヤコブ1:13はこう語ります。「だれでも誘惑に会ったとき、神によって誘惑された、と言ってはいけません。神は悪に誘惑されることのない方であり、ご自分でだれを誘惑なさることもありません。」

この問題を理解するには、「試み」と訳されたギリシャ語を理解することです。

「試み」と訳された部分で使われているギリシャ語の単語は「ペイラスモス」で、誘惑と試練の両方の意味があります。

ヤコブの手紙にはこの単語が複数回にわたって使われていますが、それぞれ違った用法です。ヤコブ1:12では、誘惑ではなく試練を指しています。

ヤコブ1:12には、試練に耐える人は幸いだとあります。ギリシャ語では同じ単語を使っていますが、ここでは試練を意味します。

有名なアメリカ人作家マーク・トウェインは、このギリシャ語の単語が弟子の祈りとヤコブの手紙で問題となっていることを知っていました。そこで、短編小説を書いてこの問題を取り上げました。この内容は、私たちにとっても分かりやすい説明かもしれません。

「ハドリバーグの町を腐敗させた男」という短編です。ハドリバーグの町は、100%正直で腐敗とは無関係であることを誇りとしていました。

親は子どもを墮落から守り、みな完璧な子どもたちでした。

町を訪れたあるよそ者は、自分たちの高潔さを自慢する町の人に気分を害し、町の人たちが本当に墮落していないかを試そうと画策しました。

このよそ者はいとも簡単に町の人々を誘惑し、彼らは罪を犯しました。

それほど簡単に誘惑に負けてしまったのは、誘惑に遭った経験がなかったからです。人はどんなふうに誘惑されるのか、誘惑に抵抗するにはどうすればいいのか、彼らは知りませんでした。

話の続きを知りたい方は、どうぞその本をお読みください。

さて、話の核心に迫っていきましょう。

悪魔は常に悪を行い、私たちに良くないことをします。一方、神は悪魔が私たちを誘惑することをお許しになります。誘惑から救われるようにと私たちが神に頼るためです。この祈りは、私たちに悪いことをさせようと誘惑する悪魔の力に勝つことができると、教えてくれます。

私たちが悪魔にしっかりと抵抗することを神は望まれます。悪魔に抵抗する経験を積むためには、その策略を知る必要があります。

この部分を終える前に、ひとつ言っておきたいことがあります。それは、悪魔が常に私たちの考えを攻撃するという事です。悪魔が私たちの思考を自分のものにできれば、私たちの言動を思いのままにできます。

ですから、私たちは自分の思いや考えを悪い影響から守らなければなりません。

パウロはコリント第二10：4-5で言いました。

コリント第二10：4-5

10:4 私たちの戦いの武器は、肉の物ではなく、神の御前で、要塞をも破るほどに力のあるものです。10:5 私たちは、さまざまな思弁と、神の知識に逆らって立つあらゆる高ぶりを打ち砕き、すべてのはかりごとをとりこにしてキリストに服従させ、

パウロは、私たちの考えをキリストに従わせてキリストのものとしなければならないと言います。

反抗的な考えを捕まえて、キリストの思いに沿ったものへと変えていく必要があります。

思い浮かぶものがすべて神からのものではありません。すべてを聖書に照らして吟味する必要があります。

悪魔は決まって嘘を言い、神は常に真理を語られます。神のみことばで満たされていれば、すべきことはおのずと分かるでしょう。

最後に、イエスは「国と力と栄えは、とこしえにあなたのもだからです。アーメン。」と締めくくられました。

弟子の祈りの最後の頌栄は、マタイの福音書の初期の写本にはありません。初期の注解書にも登場しません。

初代教会がこの祈りを礼拝で使い始めたときに書き加えられたのだろうというのが主流の見解です。

とは言え、弟子の祈りは私たちの祈りをよりよいものとするための模範ですから、初代教会から学ぶこともできるでしょう。祈りの締めくくりに神の力と御国を覚えて神を賛美するのは良いことです。

「祈りを聞いてくださってありがとうございます。あなたがわたしのために最善をお選びになるのですから、どんな答えにせよ感謝します。ここはあなたの御国であり、あなたがすべての力をお持ちなのですから。」と言っているのと同じです。

アーメン。